

# 「閨」一句鑑賞

守屋 明俊

(五十音順)

アロハシャツ大笑の君忘れ得ず 金子かほる  
今もつて忘れ得ない「君」の笑顔。それもアロハシャツを着ての磊落な大笑。看取りを終えてから遙かな時が流れても、君を悼む心は変わらない。

虫の闇君の掌ふつくらと 金田 知子

この「君」は幼い頃のお子さんとも思えるし、そうでないとも思えるが、その握った手のひらがふつくらしている」と詠む。闇夜であるから手の平がことさらふつくら感じられたのだろう。虫の音に包まれたひと時の幸。

微睡や稲刈る父母の出で座せり 金田 喜子

まじろみの中にかつての父と母の姿が浮かんだ。野良着的の父母が揃って稲刈をしている姿である。「出で座せり」に、父母への感謝の気持ちがよく表われている。

風運ぶ薊の歌や今朝の秋 北 好夫

懐かしい「あざみの歌」。「山には山の愁いあり 海には海の悲しみや」。その唄が立秋の朝、風に運ばれて

聞こえてきたという。作者の琴線に触れた一句。立秋にふさわしい、澄みきった歌声だったことだろう。

灯火とも彼は誰時の曼珠沙華 木山 有衣

「かはたれどき」の曼珠沙華が灯火のようだ」と詠む。曼珠沙華は、得てして燃えているように咲くと詠みがちであるが、この句はその陳腐さがなく落ち着いている。夕暮れ時のさびしさが印象的に表出されているよう。

二眼人見世物にする夜店かな 久保田勝一

『一眼国』という落語がある。この落語を知らない」と掲出句は理解できない。見世物を出す香具師の親方が、見世物に使えるものを尋ね、「一眼国」が在るという江戸から北方百里あまりの所に行つた。そこで遊んでいたひとつ眼の子を抱きかかえたところ、ひとつ眼の百姓たちが大勢出てきて親方は捕まることに。役人の前に引き出された時にその役人が「あッ、御同役、ご覧なさい。こいつ不思議なことに眼が二つある」。そして「調べは後回しだ。早々に見世物に出せ」と。この噺のサゲが怖い。二つ眼であるのが当たり前という社会の常識、個人の思い込みの危うさを、この噺は巧く突いている。久保田さんのこの句の夜店は、お分かりのとおり一眼国の夜店であり、見世物にされているのは二眼人（我々）である。

武甲嶺の天に弧を描く帰燕かな 栗原 季星

秋父の武甲山。いよいよ燕が帰る頃となり、五羽、六羽と飛び立つのだが、作者が見上げると武甲の嶺の遙か上空を弧を描いて飛んで行く。その帰燕の飛翔に作者はきつと立ち尽くしたに相違ない。「かな」の詠嘆は深い。

三日月の落つれば屋根を貫かむ 小坏あゆみ

新鮮な発想の句だ。三日月とて大きな星である。それが落ちたら隕石どころではない、衝突で地球が危うい。それをこの句は「屋根を貫かむ」と、三日月の寸法を氷のかたまり程度にしか見ていず、何だか可笑しい。「貫かむ」の格調の高さとのギャップに笑ってしまった。

切れ目なき主婦の一日しもつけ草 小泉まり子

主婦として毎日忙しく家事をこなしているという。それこそ「切れ目」ない一日だ。しもつけ草は戸隠あたりの山でも見られるバラ科の多年草で、紅い。花が似ている繡線菊（しもつけ）は庭木などの観賞用でよく見かける。作者にとっては息抜きのできる花なのだろう。

流星は竜のこぼした涙かな 幸喜美恵子

大きな発想の句である。夜空を奔る流星の一つ一つが竜の涙であると。竜はよく雲を起し雨を呼ぶといわれ

るが、天に昇ればその涙を流星として流すのだろう。何が悲しいのか、それは作者の胸の内にある。

秋の空小川にちよんと白い雲 小濱けえ子

秋空に浮かぶ小さな雲。それが小川に映っているといふだけの景だが、「小川にちよんと白い雲」が愉しい。空が澄み、水が澄み、作者の心も澄みきった秋の好日。

虫の声羊数ふるいとまさへ 小林ゆきお

眠れない夜には、羊を想い浮かべ「羊が一匹、羊が二匹…」と数えたものである。作者もまた羊を数えているが、虫の音に邪魔され思うように数えられない。それを嫌がるでもなく「いとまさへ」と、美しい音色を讃える。

いさかひの間も月下美人ひらき初む 小林 玲

夜に咲き朝には萎む月下美人。その美しい花とは対照的に、人の世や家庭内では「いさかひ」ばかり。俗世から離れて咲き始める月下美人の美しさだけが救いである。

運動会眼鏡にも馴れ児が走る 斉藤久美子

近視で眼鏡を掛け始めた子が運動会に出場。馴れないと転ぶ危険があるがこの子は元気に走っている。その姿が人目を惹いた。作者も安堵したことだろう。

色褪せぬ二十歳の記憶青岬 島 昌子

若い時の思い出ほど純化しやすい。悲しかったことも嬉しかったことも。晩年の暮しはこの思春期の思い出に支えられ、心の安寧をなんとか保つことができる。さて、作者の二十歳の記憶は夏の岬。真白な灯台が見える。

独り酌み彼の世にメールする無月 嶋谷 宗泰

名月が見えず無月となったこの夜。無月だからこそその寂しさが、彼の世の人へメールさせた。独酌ながら作者は彼の世の人と飲み交し「まあ一杯！」と酒を注ぐ。

菊酒と呼びて高気の酔ひ心地 清水 悠太

陰曆九月九日は重陽の節句。菊の節供とも菊の日ともいう。宮廷では重陽の宴を催し群臣に菊の酒を賜わった。作者もこの菊の酒に酔い痴れたが、普段飲む酒と異なりその酔いに気高さを感じたのだろう。目出度い一日。

秋の空橋の向うに橋いくつ 首藤 久枝

澄んだ秋の青空の下に橋があつて、そのまた向うにも幾つもの橋が見える。幻想的な句である。隅田川に掛かるたくさんの橋を想起してもよい。少し俯瞰的な視線。「橋の向うに橋いくつ」の言葉の感触があなたにかい。

破蓮やレンズを換へるカメラマン 正田 和子

芋の葉や蓮の葉は、寒さが募るにつれ刻々と色を変化させる。この句の「破蓮」も枯蓮ほどではないにせよ、枯れ色を増している。そして、その破蓮を縫うように水鳥が泳ぎ、カメラマンがこれを追う。高性能の望遠レンズも使われて、そういう場面に作者は遇ったのだろう。

処理できぬ水が処理水けふの月 新海あぐり

東京電力福島第一原発事故に起因する汚染水を処理した水（処理水）の海洋放出。国際的な安全基準に沿って安全といわれているが、如何に。海水に溶けない物質もあり、薄めても最後まで「処理できぬ水」だと作者は詠む。その海へ名月が上り、いつものように美しく照らす。

初秋の山の色なる深みどり 菅原 淑子

夏から秋へ、とは言え紅葉にはまだ早い山々。むしろ緑が一層深まり、この地に生ぎる作者の目には「初秋の山の色」と映る。はつあきのやまのいろなるふかみどりの語感のよろしさ。

テーブルの心臓葉身に入む夜 杉沢真喜子

持病のため処方されている心臓の薬。毎日飲まねばならないのでテーブルに置かれている。飲み慣れている

れど、なにげなくその葉を見た時に、作者は先行きの不安を覚えたのだ。「身に入む夜」の「夜」の慟哭。

ひぐらしや遠くなりゆくもの美しき 鈴木 智子

「遠くなりゆく」は来し方全般を言っているのだろう。悲しみも喜びも、過ぎてしまえば淡く美しく感じることもある。この句はその遠くなりゆく心を蝸の声に託して詠んでおり、秀逸。蝸の調べは正に「遠くなりゆく」。

家族皆付き合はされて庭花火 鈴木 藤子

「付き合はされて」が正直でいい。庭で花火して遊ぶ子どもを家族が微笑ましく囲む。仲睦まじく素敵な家庭だが、人間の心理は複雑。愛情はあつてもその気持ちは肉親でも個人差があろう。

水筒の水捨てられず九月尽 高橋 章子

異常気象となった今年。真夏日や猛暑が秋になつても続き、みんな参つた。家でも外出先でも水は欠かせず、作者の水筒も、九月が終ろうというのに水で満ち満ちてゐる。誰もが実感した真実の一句。

真夏日の夜こそ混み合ふマーケット 高橋満利子

真夏の夜というのは何か解放的で、それが真夏日とい

う暑い日であつても同じように何処かへ寄りたい気分になる。マーケットや地下のスーパーなども勤め帰りの人たちが混み合い、それはそれで連帯感のようなものがあり、物を買ひ込むことで明日への活力に繋がることもある。ユニークな視点の句だ。

秋刀魚食ぶ叱られながら残す腸 高橋美智子

「わたも食べられるのよ」と言われても、この苦いものは食えない。その幼少時の思い出を一句に。叱られながら結局残してしまつた苦い体験。秋刀魚を見るたびに思い出す。

草に寝て天の川観ゆ明日は下山 竹森 美喜

高い山の星が見える場所で登山仲間と一夜を明かす。草に寝てもそれ程まだ寒くはない。満天の星たちの中に天の川を観た感激。明日はいよいよ下山という感慨。満ち足りた山登りを経験した。

置き去りのウォークマンから秋の唄 田中 京

ソニーのウォークマン。一九七七年七月発売で、今でも在るといふ。作者は誰かが置いていったそれを発見。しかも、そこから秋の唄が流れていたという。誰が何故置いていったのか、その謎もなにやら秋めいて。

こんなにじつと空蟬は聴いてゐる 寺田 幸子

空蟬は蟬の殻なので生きてはいない。でも、葉っぱに  
縋るあの姿を見てみると、中に蟬の魂が宿っているよう  
な気もする。この句では空蟬がじつと何かを聴いている  
と見立てる。それを破調で「こんなにじつと空蟬を」と  
表現し句にアクセントを付けた。この用法も俳句の技術。

口中の全くジューサー砂糖黍 長井 敦子

沖繩を以前訪れた時、砂糖黍（甘蔗）の茎を搾る機械  
を見た。搾った汁からは蔗糖が採れる。掲出句では機  
械ではなく、直に口に含んで嚼む。その行為を口中が  
ジューサーだと言っているのが、洒落ていて面白い。

敬老日軽く躲して明日を活出 中嶋きよし

敬老日なにするものぞという気概が感じられる一句。  
年寄り年寄りと馬鹿にするな、まだまだ俺は頑張れるぞ  
という気持ちの高まりを感じつつも、それを言うのも大  
人気ないので、句では「軽く躲して」と軽やかに表現。  
爽やかな生き方である。へ老いを迎え入れるな 年齢なん  
かどうでもいい クリント・イーストウッド『運び屋』

われからの鳴く藻の揺れや水の音 中村 敬子

われからは『古今集』の「蟹の刈る藻に住む虫のわれ

からと音をこそ鳴かめ世をば恨みじ」の歌から来てい  
る。海藻に付着し、実際に鳴くことはないが、鳴いてい  
ると感じるのが秋の心。そのわれからに思いを馳せ、作  
者は藻の揺れと、藻を揺らす水の音に着目した。

悟りては忘るる齡秋の雪 中村 東子

一度理解した筈なのにそれがどうもあやふやになって  
忘れてしまう。そういう年齢になったのねと作者。秋の  
雪、秋雪は晩秋の季語。ちらちら降る雪にそう感じた。

とめどなき地球の涙泉湧く 中村 幹子

「空が泣いたら雨になる、川が泣くときゃ水が出る」  
という唄があつたが、地球が泣いたら涙を流すのだろう。  
でもこの句は明るく、それは哀しい涙ではなく、滾々と  
湧く泉が地球の涙だと言っている。ユニークな把握。

松茸が粲然とあり休憩所 野沢 慶子

ドライブインへ車で寄つた時に地産の山菜や果物など  
の売店があり、その中でも松茸が作者の目を惹いたらし  
い。「粲然とあり」に実感が籠っている。

凜然と秋を拒めり青銀杏 橋本 恭子

銀杏の葉は芽吹きの中から銀杏の形をし、そのまま成

長する。花は目立たないが、山下公園周辺で落花しているのを見たことがある。今年夏は暑く長かったので、黄葉にはなかなか至らず、作者は青銀杏が凜然と秋を拒んでいるように感じた。鋭い把握。

露草や修羅の涙のひと滴 長谷川菊男

見立ての句。小さな露草があたかも阿修羅の涙の一滴のように見えるという。善心を見失い妄執の悪となったという阿修羅。その修羅を露草に添えた作者。その心。涙のひと滴が切ない。

秋の谷赤にこだはり屋根を塗る 長谷部幸子

秋の谷から谷紅葉が連想される。一方、その谷間の古い一軒家では屋根を塗り替えている最中。しかも屋根に塗る色が赤ときている。赤と赤の取合せの句で、視覚的に鮮やかな景が広がる。「赤にこだはり」が巧み。

橋渡るときのよき風草田男忌 畠山 奈於

中村草田男の忌日は八月五日。へ炎天こそすなはち永遠の草田男忌 鍵和田柚子の秀句があるが、掲出句はソフト。「よき風」から草田男を偲んでいる。草田男の第一句集『長子』に「貝寄風に乗りて帰郷の船迅し」がある。風の強さは異なるが、両句とも気持ち良さそう。

飛入りを招きエイサーなほ熱く 浜田 優子

エイサーは沖縄本島中部各地で行われる旧盆の行事。元々は旧暦七月十五日の夜ご先祖の霊を送る時に行われた。別れは寂しいので青年男女が太鼓を打ち鳴らしたり指笛を吹いたり勇壮に舞う。現在では迎え盆から三日間エイサーをやっている。この句では飛入り歓迎の様子が描かれ、如何にも沖縄らしい雰囲気醸し出している。

夏休み少年すつかり蟬名人 原田ミチ子

ひと夏で少年は蟬を捕るのが上手くなった。捕るだけでなく蟬の生態もよく観察し、これですつかり蟬名人。少し大人びてきて、これも成長の一過程なのだろう。蟬名人の将来が楽しみ。

縷のごとく踊り流れて佃島 春田 千歳

佃島の盆踊りは念仏踊り。夜六時頃から子ども達が先ず仏さまに向かい手を合わせ、踊り始める。子ども達の浴衣の三尺は色とりどりで可愛く、小さな櫓の回りを回れば流れていくようで幻想的だ。夜が更け、子ども達の踊りが終ると今度は大人たちが踊る。佃島は戦時中空襲を免れたと島の古参の方から聞いたことがある。永い伝統の佃の踊り。この句の「縷のごとく」の「縷」は細長く連なる糸。そこに連綿たる歴史と命を感じる。

帰省する夜汽車の壁の日本地図 平野 豊雄

昔の汽車の連結通路付近に貼ってあった日本地図だ。夜汽車の薄暗い灯の中で帰省のたびその地図の前に立つ作者。待ち遠しい故郷はまだまだ先だが心が逸る。この句は「日本地図」が全て。望郷の情を感じる句である。

どんぐりのほろりと落ちて大東京 平野 美子

東京の新宿も明治時代は大根畑が広がっていた程の田舎。団栗が落ちても何の不思議もないが、現在の東京はビルだらけ。それでも団栗が「ほろりと」落ちてくれる。「大東京」が効いていて、韻律もよい。

秋渴き植木にずぶと活力剤 本多 遊子

夏負けした人も秋になると食欲が増し、腹がすく。これを秋渴きという。この句でも、元気がない秋渴き状態の植木が登場し、これに活力剤を上げている。それも「ずぶ」と注射でも打つように。「ずぶと」に威力がある。

鰯雲 三三五五の昼休み 水谷 光子

この句が面白いのは三三五五と漢数字を並べたところ。この昼休みはもちろん人々の取る休みだが、三三五五で何か鰯雲が整列しているようにも思えるのだ。しかも鰯雲自体が休んでいるようにも思える。日本語は面白い。

手のひらにどんぐり運ぶ勤め人 持田きよえ

どこかの公園で昼休み、勤め人らしき人が団栗を拾ったのだろう。拾ってこれを手の平に置きつくづくと愛でている。この句はそれを「どんぐり運ぶ」と表し、勤め人の開放された心を見事に活写した。

竜淵に潜みビル街にはゴジラ 森尻 禮子

季語の「竜淵に潜む」を巧みに使い、竜が潜んで姿を消したのと入れ替わりにゴジラがビル街に現れたと詠む。このビル街は日比谷。東宝映画のあのゴジラの像が立ち、その向うには東宝と書かれたビルが見える。

幾年ぞ記念樹映ゆる秋の空 八尋 信子

記念の植樹が行われてから歳月が流れた。今では立派な樹木に育ってきたのだろう、その樹が秋の空に映えている。「幾年ぞ」に作者の感慨が籠められている。

風に葉を返し棗の色づきぬ 山田 雅子

「旅順開城約成りて」の歌い出しで有名な「水師營の会見」の歌の中にこの棗の木が出てきて、塚本邦雄は「戦前派は、棗といふと反射的にこれを想起する」と言っている。棗の実にはベンガラ色。掲出句では風に吹かれながら、葉を返しながら棗の実が色づいてきたと詠

む。細見綾子の句に「風吹いて風のまにまに棗熟れし」があり、棗の実はどうやら風を呼ぶらしい。その実の味だが、綾子は「味はりんごに似ており、仙人の食べるもののような」との言葉を残している。

秋の蚊の杯に来て動かざる 横須賀智子

秋の蚊は暗がりて辻斬りみたいに一瞬のうちに刺す。その秋の蚊が家に入ってきて杯の縁に止まったというのが掲出の句。人間の盲点をつけて堂々と杯に止まり逃げようとしなない。作者も叩くわけにもいかず困ったことだろう。

農一筋傘寿の友の今年米 和田 郁子

農業は過去の経験則で行われるのが常であるが、昨今の異常気象、温暖化によりそれも難しくなっている。米の質を維持するのは大変であるが、傘寿を迎えた作者の友人は今年も立派な米を育て上げた由。目出度い。

新米を赤子のごとく洗ひけり 東 祥子

無洗米も出回っているが、やはり新米は手で研ぐ方が有難みがあつていい。この句では「赤子のごとく」といつているから、作者も有難さを感じつつ赤子を洗っている。或いはそういう場面を見ている。これも目出度い。

稲妻形<sup>ジグザグ</sup>にほどける闇夜蝙蝠飛ぶ 阿部 草薫

蝙蝠の飛び方がジグザグでそれが稲妻の模様に似ているからだろう。その稲妻形で飛ぶにつれ闇夜がほどけると作者は詠うが、それは闇夜を縫うという意味なのだろうか。蝙蝠は闇にバリアがあるが如く闇にぶつかり、直角に曲がつて飛ぶ。面白い視点の句。

敬老日ローリング・ストーンズが新作 伊澤やすゑ

まだ現役で活躍中というローリング・ストーンズ。メンバーが高齢化しても、新作を発表する意欲、元気があつて作者も驚いた。この句にも「敬老日なにするものぞ」の心意気を感じられる。

蜻蛉よ羽を休めていきなされ 市村 啓子

「まあ上がつてお茶でも飲んでいきなされ」の物言いで蜻蛉にも「羽を休めていきなされ」と勧める心を戴いた。中空を飛ぶ蜻蛉たちを仰いだ時に浮かんだ言葉。

穂絮飛ぶ風に乗る穂と乗らぬ穂と 岩根 甲

俗っぽく解釈すると、時流に乗る者と乗らない者の対比。でも作者はそんなことを思つてはいまい。穂の絮の全てが風に乗つて飛ぶわけでもない。一斉に飛ぶこともない。そのことを自分の眼で発見しただけ。写実の一句。



腹筋百回 秋天の近づきぬ 牛込はる子

健康回復を願うての腹筋運動百回。ええ？本当？と腹筋のできない私は思うのだが、どうも本当らしい。百回満願は御百度を踏むようなものなのだろうか。身を起すたび、澄んだ秋空に近づくと気分になるのだから凄いい。

運動会余興の仮装おてもやん 内海 範子

おてもやんは熊本地方の陽気な民謡。明治33年頃に熊本市の永田稲（慶応元年生れ）という女性が作詞、作曲、振付けをし、戦前には花柳界のお座敷踊りとして芸妓が踊っていた由。明るくて芯の強い熊本の女性の象徴でもある「おてもやん」。その仮装した姿が現代の運動会に蘇った。子らはキョトンとし、爺婆たちは大爆笑。

早晩に弦音のやう雁渡し 大下 壽櫻

雁渡しは、雁の渡る頃に吹く北風。伊豆や鳥羽の船詞という。この句では夜明けの晴れてきた北の空から風が吹き、その風の音が矢を放った時に鳴る弦のような音だったと詠む。一度聴いてみたいものである。

抜けてゆく眉間のちから望の月 太田 裕子

旧暦八月十五日の夜のお月見。京都の冷泉家ではこの晩、月を見ながら十五首の歌を詠み、翌日の十六夜では

十六首の歌を詠む。月はひっそりと眺めるのが日本の古来の習い。この句の「抜けてゆく眉間のちから」も、見ようという強い目ではなく、眺める目から生まれた自然な感覚であると思われる。美しい望の月が見えてきた。

彩雲をひとひら浮かべ秋深し 大塚 忠孝

彩雲は縁が美しく色づいている雲。ネットのウイキペディアには「太陽の近くを通りかかった雲に、緑や赤などの多色の模様がまだらに見える大気光学現象」とある。それがひとひら浮かび、秋深しの感慨が作者に芽生えた。

秋めくや空に自在の雲の湧き 小河原政子

この句も秋の雲。浮かんでいる雲ではなく、次々と湧いてくる雲。定めなき秋空は雲の変化も多く、斜交いに描かれる筋雲はことに美しい。「自在の雲の湧き」に共鳴した。

大文字炎の音がみえてくる 小野 直美

八月十六日の夜の京都東山の「大文字五山送り火」。山口誓子に「燃えさかり筆太となる大文字」がある。掲出の句もその炎を詠み、炎の音を詠むが、炎が見えたと同時に炎から確かな音が心に届いたのだろう。つまり作者はその音を通して炎を見たのである。独創性のある句。